遊戯王 LEGENDs～伝説の名の元に～

廃棄人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王　ＬＥＧＥＮＤｓ～伝説の名の元に～

【Ｎコード】
Ｎ１１５８Ｙ

【作者名】
廃棄人形

【あらすじ】
俺、一ノ瀬燈夜は別段変わった生活をしてた訳じゃない。友達と高校行ったり、遊戯王やったり、デュエルモンスターズやったり、決闘したり……。
今日も、久し振りのチャンピオンシップ……通称ＣＳに出掛けるところだった。
突如聞こえる声。

次々と倒れる皆。
そして、とうとう俺も……！

次の瞬間。

眼を覚ました俺の前に居たのは、ブラマジとブラマジガールだった――。

※『遊戯王　僕らの進んで行く道』と並行して連載することになりました。
向こうは、コラボ相手である『紫苑の槍』様との相談の結果、一週間に一度の更新になりますが、こちらはそういうのも無く、不定期更新になります。

なるだけ早くしたいと思ってますよ、ハイ。

「別れの言葉は、要らないよな……」

――事実は小説より奇なり。

真っ先にそんな言葉が思い浮かぶのは、俺が変だからだろうか。いや、俺自身、自分で小説を書いているからだろう。そう思いたい。

そういえば……あの小説、今良いところだったんだよなぁ。主人公が最後の戦いへと出向いていったのに、複数のヒロインはそれを知らずに仲間たちと平和な時間を過ごしている。

その時、主人公が行った言葉はただ、一言。

「別れの言葉は、要らないよな……」

『あの～……私の話、聞いてる？』

「何も見えない聞こえない世界は平和です本当にありがとうございました」

ビバ、現実逃避☆

◇　◇　◇

遊戯王チーム、ＬＥＧＥＮＤｓ．伝説という名を付けて、俺たちは活動していた。

活動っていっても、実際はそんなに大逸れたことをしたわけじゃない。各地の遊戯王チャンピオンシップ……通称ＣＳに出向き、デ

ュエル動画を撮影、投稿し……ブログを作ったりして。
メンバーは俺含めて４人だけだ。それぞれ一癖も二癖もある性格だから、人気が分割されてた。

「あ゛〜……ねみぃ」

瀬野基（せのハジメ）。耳にピアス、ドクロのシルバーネックレス。指には指輪……見た目だけならばかなり素行の悪そうな不良だが、実際は心優しい男だ。
俺が初めて会った時は、凄い荒れてたっけな……。

「……お前のことだ。昨日、夜遅くまでデッキの調整でもしていたのだろう？」

……クールだ。凄くクールだ。クールになれよっ！　とは言わないし言われもしないだろう。
瀧川幸仁（たきがわユキヒト）。長い髪を後ろに縛っている、メンバー内一番の長身だ。少しで良いからその身長を分けて欲しい。

「今日は久し振りのＣＳだもんね〜。僕も楽しみで眠れなかったよ！」

コイツは長谷部慧（はせべケイ）。中世的な顔立ちで、女装させれば凄く似合うんじゃないだろうか。
何故か走らないけど、俺に凄く懐いている奴だ。一部ではゲイ疑惑も浮かび上がっている。勿論、お相手は俺……やれやれだ。

「んなことより、早く行こうぜ？」

そして俺、一ノ瀬燈夜（いちのせトウヤ）。メンバー内で一番特徴が無い、という嫌

味な理由でリーダーやってます、ハイ。
……そりゃ、自覚してるけどさっ。3人みたいに顔が良いって訳でも無いし……頭も良くない、運動神経もびみょ〜……良く鈍感って言われるし……あ、涙が。

「なんで泣いてるの、燈夜？」
「……自分が情けなくなって……つか、ちけぇよっ！」
「あぁっ」

なんでそんなに残念そうなんだ！？
そんなんだからマン研（マンガ研究会……という名の腐女子の集まり）にネタにされんだよっ！　無駄に絵が上手いのがさらにムカつく！
……閑話休題。何言ってんだか、俺。

『――やっと、見付けました』

「……え？」

声。無駄にイケメンボイスの声が、脳内に響く感じで聞こえてきた。
……とうとう俺も厨二病か！？

「誰だっ！」

と思ったら、どうやら聞こえたのは俺だけじゃないらしい。
基が声を張り上げてるし、幸仁は怪訝そうに眉を潜めながら辺りを見渡しているし……。慧に至っては、何故か俺に抱きついてるし。

「皆にも聞こえた……のか？」

「ああ……男の声だった」
「はっ？　俺ァ女だったぞ？」
「僕は男の人だったけど……」

……基だけ女性の声？
それにしても……４人全員聞こえたって事は、ただの厨二病の症状じゃないってことだよな……一体何なんだ？

『私たちの為に、戦って欲しいのっ！』

「うわっ！？」

こ、今度は女性の声……！？　しかも、どこかで聞いたことのあるような……！？
頭が混乱して、訳が分からなくなってきた頃。

――基が、ばたりと倒れた。

「基っ！？」

そして、幸仁が。

「幸仁……！」

最後に、崩れていくかのように俺の身体から落ちていく慧。

「け、慧……」

何が、どうなって――。

次の瞬間だった。

頭が少しずつぼーっとしていく感覚。身体の力が無くなっていく感覚。

数分後。

その場には、誰も居なかった。

「別れの言葉は、要らないよな……」（後書き）

『遊戯王　僕らの進んで行く道』の方と合わせて、感想、評価などお待ちしております！！

「……現実逃避して良い？」

「……え？」

――ここ、どこだ？

朝なのか昼なのか分かり難い明るさの空。眼を細めて遠くを見つめると、山や海、ガラクタの詰まれた場所……様々なところが見える。

……俺、そんなに眼が良いわけじゃないから見間違いだろう。若しくは夢だ、間違いない。

そう思って俺は頬を抓る。捻(ねじ)るように引っ張った。

「……ひたひ」

馬鹿な……そうか、これは痛みのある夢なんだ！

『お目覚めですか』

「うひゃあっ！？」

だ、誰だっ……！？

視線を後ろにやると、誰も居ない……訳も無く。半透明で、且つ宙を浮いている黒い魔道服を着た男性。勿論、右手には杖。

……。

「夢だ……目の前に《ブラック・マジシャン》が居るなんて夢だ……っ！」

通称ＢＭ。アニメでパンドラって奴が使ってたギャル風ＢＭじゃなくて、普通の……普通のって言うのも変だけど……武藤遊戯が使ってたＢＭだ。
つまりは……マハードだ、うん。

『おはよう、マスター♪』

「……は？」

……え。まさか、そんな。
ブ……！

「《ブラック・マジシャン・ガール》！？」

『マナって言いま～す！』

にっこり。あ、可愛い。
じゃなくて！　え、つまりどういうこと！？　つか、その服、カードで見てた時もエロいなぁ、なんて思ってたけど……実際見るともっとヤヴァイ……！！

「やっぱ……夢だ……」

しかし、夢でもＢＭＧ（ブラック・マジシャン・ガール）に会えるなら別にこのままでも……げふん、げふん。

『夢では有りません』

「いやいやっ！　これが夢じゃければ、何が夢なんだよ！？」

『ん～、将来の夢？』

……間違ってはいないけどさ。

「……万が一……万が一、これが夢じゃないとしたらさ……なんで俺を呼んだんだ？」

『マスター……燈夜殿には、世界を救って頂きたいのです』

……何、そのテンプレ発言。

「世界を……救う？」

そりゃ、アニメではそんなようなこと起こってたけどさ。

「……訳わかんねー」

『私たちにも原因は分からないだよね。なんか突然、色んな世界が崩れ始めちゃって……既に２つ、滅んじゃった世界もあるし』

は……滅んだ世界？　世界ってやっぱ複数あったのか？　小説を書いてる身として、異世界の存在があれば良いなー、とは思ってたけど……。

けど、俺は素直に喜べない。滅んだ世界があるってことは、その世界に住んでいた人たちは死んじゃったってことだ。

残念ながら、ＢＭとＢＭＧの表情は重い。とても嘘を吐いているようには見えなかった。

「マジ……なんだよな？」

『ええ。そして決まって、滅ぶ世界はデュエルモンスターズ……地球で言う遊戯王が盛んな世界なのです』

もしこれが夢じゃないとして、と考える。

今、俺が居るこの場所は精霊界ってところだろう。アニメで見た風景よりもちょ～っと違うけれど、ＢＭたちが居るんだから間違いない。

そして、遊戯王が盛んな世界。アニメの世界みたいなデュエルモンスターズが絶対の世界もあるんだし、地球は盛んじゃない方なんだろう。

そして、何よりも……ＢＭは言った。世界を救って欲しい、と。

原因が分からないのに世界を救って欲しい……ってことは、多分遊戯王が盛んな世界に俺を行かせて、原因を探らせようという魂胆だろう。

「……なんで俺なんだよ？」

『私たちが選んだんだよぉ。マスターなら世界を救ってくれる、って！』

「……買い被りすぎだろ……ん？　なぁ、つーことは慧たちも……？」

『彼らも世界を救ってくださる勇者に選ばれたのです。尤も、選んだのは私たちではございませんが』

ってことは、あいつらもこの世界のどこかに……。

俺は一度、大きく深呼吸する。気持ちを落ち着かせて、腕を組む。

「……最後に確認。本当に……ほんと～に、夢とかじゃ無いんだよな？」

『うん、夢じゃないよ～？』

「……はぁ～」

おーけー、夢じゃない。信じよう。ＢＭＧが折角笑顔を向けてくれたんだから信じない、なんつー選択肢は無い。

ただ……信じる代わりに一言言わせてくれ。

「……現実逃避して良い？」

『駄目です』

即答だった。

◇　◇　◇

アニメで相棒や王様、勿論覇王とかが居た世界とはまた違う世界。

俺は《ブラック・マジシャン》と《ブラック・マジシャン・ガール》……もとい、マハードとマナの導きによってこの見知らぬ世界に降り立った。

観衆の元じゃなくて良かった……なんて安堵の息を零す。

あ、そうそう。
ＢＭやＢＭＧの名前はアニメで出たマハードやマナだけど、王様が使用してた存在とは違うんだってさ。俺はそれよりも、王様達が別の世界で実在していた事が驚きなんだけど。
それはともかく、マハードとマナは正真正銘、俺が初めてのマスターらしい。

人の居ない路地裏を抜け、俺は日の光を浴びた。空には雲１つ無く、地球と変わらぬ広い青空が世界を包んでいた。
ひゅー、と駆け抜ける風は髪を撫で、柔らかく揺れる。

「そういや、慧たちもこの世界に来てるのか？」

『うん、居るよ。一番早い基さんなんて、半年も前から来てるし』

「は、半年！？」

なんでそんなに時間が空いてんだ……？

『この世界と精霊界は、時間の流れ方が違うのです。幸仁殿は４ヶ月前、慧殿は２ヶ月前に来ています』

……そうなのか。
はぁ……しっかし、やっぱり夢じゃなかったんだな……。
改めて、俺は辺りを見渡す。

この世界はアニメの世界と同じく、デュエルモンスターズが中心の世界だ。道行く人の全員が様々な色のデュエルディスクを手に付けているし、そこらにある店舗の半分以上がカードショップだ。
……カードショップだらけって……競争が激しそうだなぁ。

「さて……これからどうすっか……」

当たり前だけど、俺は金が無い。いや、元々金欠気味ではあったんだけど……文字通り一銭も無い今よりはマシだった。

このままじゃ、世界を救うなんつー大業を成す前にのたれ死ぬぞ。

「きゃっ……！」

「ん……？」

女性の声……？

きょろきょろと視線を巡らす。すると、視界の端に路地裏へ連れ込まれていく女性の姿が見えた。周りの人たちは見て見ぬフリをしている。

「……」

連れ込まれた……？

助けに行かなきゃ、という気持ちと怖い、という心が交差する。俺は暫くその場に立ち尽くし、唇を噛んで顔を背けた。

『助けなくて良いの、マスター？』

隣にふわふわ浮いているマナ。

そりゃ、助けたいさ……けど、“昔”とは違うんだ。“昔”みたいに無鉄砲じゃないって自覚しているし、子供でもない。助けたところで、俺に利なんて無い。

そうだよ……普通なんだ。自分の事だけ考えてれば良い。

――こんな身体になっちゃって……。

「俺は……」

――燈夜に愛される資格、無くなっちゃった。

「……」

――――バイバイ。

「……チィッ！」

何、迷ってんだ……俺。後の事なんて考えるなよ……俺らしくねえぞっ！？

一気に路地裏へと脚を動かした。恐怖で奮え、止まってしまうそうになる度に心中で喝を入れ、走りながら大きく深呼吸した。

路地裏では、３人の男が居た。金髪に赤髪、それと茶髪野郎。少し離れた場所に４つのデュエルディスクが転がっている。

１つはピンク色だし、女性のやつだろうか。

アニメで見たデュエルアカデミアの制服みたいな服装は破り千切られ、スカートも切られている。純白の下着がモロ見えだ。

プチン、と。

何かの糸が切れる音がした。

「よぉ……楽しいことしてんじゃねェの？」

基みたいな口調になる。イライラとする心を落ち着かせるつもりなど毛頭無く、俺は感情のまま身体を動かす。

「なっ、なんだお前……！？」
「んなもんどうでも良いだろーが。それより、随分と上玉見つけたな、てめぇら」
「は、なんだよ……お前、混ぜて欲しいのか？　最後なら別に良いぜ？」

茶髪がそう言うと、身体と口を押さえられている女性の顔がさらに絶望の色へと染まっていく。

「なら、俺も混ぜてもらうかな……」

近付く。片手で女性を触ろうと、俺は手を――。

金髪の頬をぶん殴る為に振りかぶる。

「がはっ！？」
「て、てめ……がっ！」
「ぐふっ……！？」

金髪を殴り飛ばし、赤髪の腹を蹴り、茶髪の鼻っ柱をグーで殴る。
ざまぁ見ろ。
俺は上着を脱ぎ、女性に掛けてやる。きょとんとした表情の女性は少し可愛らしいけれど、今はそんな事を考えている暇は無い。

「大丈夫？」
「は、はい……」
「そう、良かった。立てる？」

コク、と頷くのを見た俺は身体を支えながら立たせてあげる。そ

してデュエルディスクのあるところまで歩いた。
ピンク色のディスクを持って、女性に差し出す。

「これ、君の？」
「そ、そうです……」

それを持って、路地裏から脱出しようと歩を進める。

「ま、待てよ……」
「あ〝ぁ？」

やべ、スゲェ殺気立った声出た。
茶髪は見事に気絶しているが、金髪と赤髪はよろよろと立ち上がっていた。特に金髪はデュエルディスクを左腕に取り付けていて、展開させていた。

「おい、デュエルしろよ」

……その台詞、まさか現実で聞けるとは思わなかった……。しかもアニメだと、主人公が言う言葉だしな……。
つか、アレか？　デュエルで自分たちが勝ったら女を置いてけとか、そんな感じ？　そんなんぜってーヤダね。
とは言え……。

（ここ、遊戯王が主な世界なんだよなぁ……仕方ない）

「ごめん、俺、デュエルディスク持ってないんだよね……借りて良い？」
「あの……私がデュエルします。元はと言えば、私が――」
「大丈夫だよ。俺は君を助けに来たんだし、最後までケリ付けない

と」

ピンク色のデュエルディスクを左腕に取り付けて（初めてだから少し手間が掛かったのは秘密）、多重スリーブに入ってるデッキを装着する。

……良く入ったな……それにしても、俺がいつも使うメインデッキだけケースに入れてベルトに取り付けといて良かった。

俺がこの世界に持って来た物といえば、このデッキだけだしな……携帯や財布はバッグの中だけど、そのバッグは多分日本に置いたままだし。

デッキがディスクによって勝手にシャッフルされる。ＬＰが４０００と表示され、その下にあるランプが光った。

……４０００？　マジで？　無いわー。

……それにしても。

（……何、このランプ？　充電切れ？）

「チッ、先攻はお前かよ……」

「仕方ないじゃんか。あっちのターンランプが光ったんだからよ。ま、後攻だから攻撃出来るし、良いんじゃん？」

……ご説明どうも。

んじゃま、

「デュエルっ！　――って言えよっ！！」

……あ、すんません。

「……現実逃避して良い？」（後書き）

マナの性格があやふやだ……っ！

そして、コメディって難しいッス。

誰かおせーて（泣）

感想、評価等お待ちしております！

「……初めて、だったんです」

「えと……俺のターン、ドローします。スタンバイ、メイン入ります」
「あの……何言ってるんですか？」
「へ？」

……えっと、言うの、変？
うぅ……地球じゃこれが普通だったしなぁ……アニメみたいにデュエルすれば良いんだよな？　ってことはアレか、効果とかも説明するのか？　たるー……。

「《熟練の黒魔術師》を召喚しま……召喚！」
「……アイツ、なんか変じゃね？」

気にするな。

「《魔法族の里》を発動！」

おぉ、フィールド魔法は横に差し込む場所があったのか。そういやアニメでもそうだったな。
辺りに木々が生い茂る。魔法使い族モンスターが住む舞台が整った。

「自分フィールド上にのみ魔法使い族モンスターが存在する場合、相手は魔法カードを発動する事が出来ない」
「ちっ……厄介だな」

まぁ、デメリットで相手が魔法使いを召喚したり、俺の場に魔法

使いが居なくなったりしたら意味無くなるんだけどな。特に後者だと、俺が魔法を発動出来なくなっちまう。
ちなみに、この時《熟練の黒魔術師》に魔力カウンターが乗る。
《熟練の黒魔術師》魔力カウンター0→1.
「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」
「俺のターン、ドロー行くぜっ！」
元気良いな。俺に殴られたからか、鼻の辺りは赤いけど。
「《ジェネティック・ワーウルフ》召喚！」
おぉ、純粋に強い。
下級通常モンスターでは今のところ、最高攻撃力を持っているモンスターだ。
……ちなみに、遊戯王カードＷｉｋｉでこのカードを見ると、もしかすると女性かもしれないって書いてあるんだから面白いよな。
「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」
「うぅん……いいや。俺のターン、ドローっと」
ライフ……４０００だろ？　あれ、つーか何で攻撃しなかったんだ？　伏せカード警戒？　俺なら攻撃するのに……まぁ、プレイングは人それぞれだしな。
……一言言うと。
……結構チキン？
「あの伏せ……気になるから、割りに行くかね。俺はまず、速攻魔（サイクロン）

法発動！　その伏せカードを対象にする！」
「チッ……《炸裂装甲（リアクティブアーマー）》が」
……《炸裂装甲》？　《次元幽閉》じゃなくて？
……まぁ、良いけど。
《熟練の黒魔術師》魔力カウンター1→2．
うーん……このまま熟練の効果使いたかったけど……ライフ４００だし、別に良いか。
「リバースカードオープン、速攻魔法（ディメンション・マジック）！　自分フィールド上に魔法使い族モンスターが存在する時、自分のモンスター1体をリリースして手札から魔法使い族モンスターを特殊召喚する！」
……説明って疲れるなー、ったく。
「《熟練の黒魔術師》をリリースし、《ブラック・マジシャン・ガール》を特殊召喚！」
『はーい！』
はぁ、癒される……。
なんて思っていたけれど、驚いた様子で女性、金髪に赤髪、茶髪がマナを見つめている。
……茶髪、いつの間に起きたんだ？　三沢みたいなエアーマンだな、お前。
「ど、どうして《ブラック・マジシャン・ガール》が……？」
「……なんか悪いの？」

「ぶ、《ブラック・マジシャン・ガール》は伝説のカードです！世界で1枚しか作られていないカードですよ……！」

え……デッキに2枚入ってるけど。

「偽者か……？　いや、偽者じゃあディスクが反応するわけねーし……」

偽者なんて失礼な。

「まぁ、気を取り直して……さらに《ディメンション・マジック》の効果は続く！　お前の場に居る《ジェネティック・ワーウルフ》を破壊する！」

「チッ……」

良し、これで相手の場はがら空きだな。

「行くぞ、マナ！！」

『は～い！』

「魔法カード、《賢者の宝石》！　自分フィールド上に《ブラック・マジシャン・ガール》が存在する時、手札またはデッキから《ブラック・マジシャン》を特殊召喚出来る！」

「え……まさか、《ブラック・マジシャン・ガール》と同じ伝説のカードまで！？」

……ブラマジもか。デッキに3枚投入してますけど、何か？

「来い、マハードっ！」

『はっ！』

やべ、デュエルディスク使ってのデュエルって楽しい！　テンション上がるな、コレ！

場にブラマジとブラマジガールの師弟が並ぶ。ソリッドビジョン？　で見るとスゲェ……良い！！

「バトルっ！　マナで相手プレイヤーに直接攻撃！　――黒・魔・導・爆・裂・破！！」

「うあああぁぁぁっ！」

金髪ＬＰ４０００→２０００．

「トドメ！　マハード……！　――黒・魔・導！！」

「あああぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

金髪ＬＰ２０００→０．

「……大袈裟じゃね？」

しかし、本当に気絶しているらしい男たち3人を見て、俺は凄くスカッとした気分になった。

◇　◇　◇

「……ふわ～」

なんて間抜けな声が出てしまうくらい、今、俺が居る家は大きかった。
それこそ、アニメや漫画、後はＴＶの中でしか見た事が無いくらいの大きな屋敷。庭もかなり広いし、メイドや執事も大勢。
つまりは、

「君って、お嬢様だったんだな……」
「そんな、お嬢様なんて……」

その屋敷の中の一室。
無駄にふかふかなソファに座って、俺は驚きに顔を歪めている。
向かい合う形で座っている襲われていた女性はふるふると首を振った。

「私の事は結姫（ユウヒ）って呼んでください」
「じゃあ、結姫……さん？」
「呼び捨てで構いませんよ、燈夜さん」

……それはそれで、緊張するなぁ。
彼女の名前は咲之宮結姫（さきのみやユウヒ）。この世界ではかなり有名な企業の三女らしい。アニメで言う海馬コーポレーションとかだろうか。

「本日は、本当にありがとうございました……！　あのままだったら、今頃……」
「気にすんなって。当然だろ？」

とか言って、最初はビビリまくりだった俺。けれど、目の前に居るのは凄い美少女だ。格好付けたくなるのは当然……だよな？
ピンク色の髪はセミロングくらいの長さで、凄くさらさらしてる。

蒼い瞳は宝石のように綺麗で、ずっと見つめていたら吸い込まれてしまいそうだ。
ドレスの上からでもスタイルは良いし……なんつーか、凄い美人だ、うん。

「それでも……本当に、なんとお礼を言ったら良いか……」

……まぁ、気持ちは分からなくないけど。
けど、最初は見捨てようとしたくらいだし、ちっと罪悪感がなぁ……ごめん、結姫さん……もとい、結姫。

「あのっ、今日は泊まって行きませんか！？」
「はっ？」

この子、突然何をっ？

「お礼したいんです。今日はたっぷりお持て成しさせてください！」
「いや……ほら、ご両親に迷惑だし」
「大丈夫です。この家は私個人の物ですから、父と母は住んでおりません！」

……それ、もっと拙(まず)くない？

「それとも……迷惑、ですか？」

う……そんな小動物みたいな顔をされたら……。

「お、お言葉に甘えようかな～」
「はいっ！」

……断れないって。

凄く嬉しそうに笑顔を浮かべる結姫、ちょっとドキッとした俺。

勿論、それは秘密だけれど。

――それから、凄く大変だった、と言付けしておく。

使用人ではなく結姫が作った料理は……正直、美味しいと言うにはちょっと……なんつーか、個性的だったし、結姫の部屋で一緒に寝よう、と言われて一悶着あったし。

何より、かなり大きな風呂に俺が入って少ししたら、背中をお流ししますとか良いながら結姫が入って来るんだもんな。勿論、バスタオル1枚を羽織っただけの姿で。

……アレは焦った。

そして、夜。俺は結局、結姫の押しに負けて彼女の部屋に居座っていた。

現実では始めて見る天蓋付きのベッドに、ピンク色の絨毯。幾つかぬいぐるみも置かれており、なんつうか、ちょっと豪華なところ以外は“普通”の女の子の部屋だった。

妙にドキドキしながら部屋のベッドに腰を下ろしながら待っていると、コンコン、というノックと共に部屋の扉が開く。

「お、お待たせしました……」

「……ぅう」

当たり前だけど、パジャマ姿だ。黄色いパジャマに身を包み、風呂に入ったせいか頬が紅潮した結姫の姿は……かなり、可愛いし、色っぽい。

俺は無意識にも顔を背けてしまう。

「じゃ、じゃあ寝るか！」

俺はその緊張感に耐えられなくなって、結姫より先に布団の中に潜ってしまう。勿論結姫の場所を空けてだが。

カチ、と電気が消される。俺は結姫に背を向ける形で横になっていると、その背中にふにょん、と柔らかい感触が……。

「ゆっ、結姫！？」

「温かいですね……」

あ、当たってる当たってる……！　何がとは言わないけど、マシュマロの山が２つぅ……！！

「……今日は、本当にありがとうございました」

「べ、別にそれは気にしなくて良いって……」

「私、人に助けて頂いたの……初めてなんです」

……え……？

「天下の咲之宮家……カード業界や勿論、経済や政界など様々な業界に手を伸ばしている家柄……姉２人は才能があったのか、どんどん力を付けていきました」

まぁ、俺はまだ咲之宮家がどれだけ凄いのか分からないけど……それでも、相当凄いんだろうなぁ、と曖昧には分かる。

「……妹も、最年少のプロデュエリストとして、活躍しています……それなのに私は……アカデミアに入学しても、妹には全く勝

てませんし……姉2人にも、置いてきぼりで」
「……」
「私、捨てられたも同然なんですよ。実際、姉や妹は実家で暮らしていますし……私はこの屋敷を与えられて、複数の使用人と共にここで住め、と……」

気が付くと、結姫の声が震えているような気がした。身体も小刻みに震えていて、それが背中を通して俺に伝わっている。
プレッシャー、もあるんだろう。
大きな家に生まれ、育ち、これからも生きていく……その上でのプレッシャーは、俺なんかには想像出来ないものなんだろう。

「今日、私が襲われていた時……心の奥底で思ったんです。ああ、これも良いかな、って」
「は……？」
「このまま襲われてしまえば、自殺する理由が出来るなぁ、って……」

俺が借りてるパジャマが湿り始めた。

泣い、てる……？

「……初めて、だったんです」

結姫の腕が俺の身体を抱き締めるように回り込む。脚も絡めて来て、俺の結姫の身体が完全に密着した。

「誰かに、助けて貰うのは……初めてだったんです……！　まるで……心の蟠(わだかま)りが溶けて行く感じがして……」
「ねぇ、結姫」

俺は結姫の言葉を遮って、口を開く。

「敬語、止めて良いよ」

「え……？」

「無理、してるだろ？　俺はもう、お前の友達なんだからさ……気兼ねなんてしなくて良いって」

「燈夜……さん」

「名前も、呼び捨てで良いし。な？」

上半身を起こして、まだ少しだけ湿っている結姫の頭を撫でる。なるべく優しく、優しく。

「とう、や……」

「何か困った事があれば俺に言え。出来る限りの事はしてやるよ。友達……だもんな？」

「ふ……うえぇ……」

ちょっとクサかったかな、なんて思ったけど……どうやらこれで良かったみたいだ。

俺の胸に抱き付きながら、大きな声で泣き崩れる結姫の頭を優しく撫でてやりながら、俺は暫くそのままで居てやる。

窓からは、満月の光が俺たちを覗き込んでいた。

「……初めて、だったんです」（後書き）

小説って、難しいですね……（汗）

……やっぱりプロットを録に作っていないからツライのか。

ヒロインの人数さえ決めてないしねっ↑

感想、評価等お待ちしております！！

「なんつーか……運命感じるな、コレ」

「あ、おはようございます、燈夜さん！」
「ん……おはよう、結姫」

翌朝。
珍しく……というか初めて鳥の囀（さえず）りで眼を覚ました俺がリビングに行くと、既に起きていたらしい結姫の出迎えを受けた。
そういや、使用人方が居ない……違う部屋とかかね？

「朝食、出来てますよ」
「ありがと。……ところで、君が作ったの？」
「い、いえ……。私が作ると……その、美味しくなかったですし」

あ……気付いてたんだ。
なんて思ったけど、口には出せずにあはは、と空笑いしておく。

メイドさんが作ったという豪華な朝食の前に俺と結姫は腰を下ろす。

「「頂きます」」

ほぼ同時に食事前の挨拶をして、箸に手を伸ばした。

「ん、美味い！」
「はい。私のとは大違いですよねっ」

……結構ショックだったのか、お前？

「……今度教えて貰いましょう」

……頑張れ。

ちなみに、昨日の夜、口調は砕けて良いよ、とは言ったけれど……昔からこの口調だったからか、最早これが素なのだという。また、呼び捨てだと何故か落ち着かないらしい。姉妹ならともかく。

「さて、と」

朝食を美味しく頂いた俺は、ん～、と伸びをして立ち上がる。隣に浮かぶマハードとマナに視線を送る。

「んじゃ、行くかな」

「え……もう行ってしまうんですか？」

食器を運んでいくメイドさんたちを尻目に、俺はああ、と頷く。

「あの……失礼ですけど、どこに行くか……聞いて良いですか？」

「え？　あ～……」

マナに視線を送ると、視線を逸らして頬を掻いていた。んにゃろう……。

「……分かんね。行く場所無いし……適当に歩き回るんじゃないかなー」

この世界にゃ勿論、親や家があるはずも無いし……行く当ても無い。マハードやマナも、正直今のところは役立たず、って感じだからなぁ……。

……せめてもうちょっと準備して欲しかった、うん。

「な、ならっ……！」
「へ？　何？」
顔を輝かせて近付いてくる結姫。
えと……？
「わ、私と一緒にアカデミアへ行きませんかっ？」
――説明をしてもらうと。
今、結姫が通っている第壱デュエルアカデミア樫都（かしど）校という場所に通っているらしく、今は春休みなんだとか。
後1週間程度で寮に戻るらしいんだけど、その際、俺も編入者として一緒に行かないか、というもの。
「いや、俺、金も持ってないし……学費とか寮費？　とか払えないんだよね……それに、経歴とか無いから編入は難しいと思うよ？」
「大丈夫です。第壱校は咲之宮家が設立しましたから、例え私でも顔は利きますよ」
「……」
え、何それ怖い。
なんて冗談は置いといて、俺は本気で迷う。
全寮制で、食事や部屋は勿論出てくるし、結姫の話によると島に建っているらしく、アカデミア内でアルバイトをする事も可能だとか。
成績も上がれば学費免除、とかで結姫の迷惑にもならなくて済むらしいし……何より。

……今の俺、家無しの上に無一文……うわ、情けねェ。

「えと、じゃあ……お願いします」

「はいっ！」

ホント、いつか恩返ししなきゃなー……。

そんな事を思いながら、俺はにっこりと笑っている結姫に苦笑を浮かべたのだった。

◇　◇　◇

――手続きとかは私がしておきますっ。私はとにかく、燈夜さんに恩返しをしたいんです！

なんて握り拳を作りながら力説されてしまったら、俺は何も言い返せない。俺としては、一晩ふかふかのベッドで眠らせてもらったり、美味しい食事を貰っただけで充分なんだけどな……。

そんな事を言ったら、結姫はまた色々言葉を並べて否定するだろうから黙っておいた。

――俺は只今、町を探検中であります。

ちゃんとここに帰って来てくださいね、と念を押されながらも町へと繰り出した俺は、色んなカードショップを見て回りながら進んでいた。

「……なぁ」

『どうしたの、マスター？』

俺の声に反応したのは、マナだった。というより、基本的に俺の傍に居てくれるのはマナらしい。マハードはたまにしか出て来てくれない。

……閑話休題。

「……もしかしてこの世界って、」

『シンクロやエクシーズは無いよ？』

「……ですよね」

白いカードや黒いカードは勿論、チューナーさえも無いんだからなぁ……。俺の予想は大当たりだ。残念な事に。

どうするよ……俺のブラマジデッキ、チューナー入ってるぞ？アーカナイトやテンペスター、ライブラなどの魔法使いシンクロモンスターしか基本的に使わないとは言え……はぁ。

しかも、俺は余りのカードなんて持っていない。カードを入れ替える事すら出来ないなんて……不便だ。

「……ん？」

テレビだ。ガラスケースの奥にあるテレビに、3人の人間が映って、俺はふと立ち止まった。

男2人に、女1人。

銀髪に染めたガラの悪そうな男と、長い髪を結んでいる男。ショートの髪だけど、柔らかい髪質っぽくて結構可愛らしい女の子……

……？

「は、基！？　幸仁……！？　って、コイツも……良く見たら慧じゃねえか！」

な、なんでテレビに……？　しかも慧に至っては……女装？

……ほわぁい？

そっかそっか、コイツラ芸能人になったのか。慧は……あれだ、需要を狙ってとか？

『この３人、実はお知り合いとの事で集まって頂きました！　突如樫都（かしど）町に現れたこの３人こそ、巷で有名なシンクロ召喚、エクシーズ召喚を行う数少ない人材なのですっ！』

あ～、成る程。そういうことか……ちなみに、言い忘れてたけど樫都町とは今俺が居るこの町の事だ。

つまりはアレだろ？　この世界に来たばっかりのあいつ等は何も知らずにシンクロやエクシーズ召喚をしちまって、一気に有名になった。それがこの結果、と。

――でも……なんで慧は女装してんだ？

しかも良く見てみれば、基たちが着ているのは昨日、結姫が着ていた制服と同じだ。違うところと言えば、基と幸仁が着ているのは青だってところだけ。

……慧や結姫の制服は赤のブレザーだ。

――んで……なんで慧は女装してんだ……？

謎だ。

『この3人は今、第壱デュエルアカデミア樫都校にて、数少ない特待生枠として選出されています！』

マジか……アイツラ、第壱校に居るのか。

「なんつーか……運命感じるな、コレ」

顔が自然と綻ぶ。良かった……1週間後、俺が編入する頃には会えるんだ。

俄然、やる気が出てきたぜ……！　早く会いてえな！

◇　◇　◇

「チッ、たりー……」

「そう言うな、基」

「るせーよ」

街を歩く3人の男女。正確には格好だけだが。

両手をポケットに突っ込み、元来の目付きの悪さがさらに際立ちながら歩く瀬野基。

後ろで結んだ長い髪を揺らしながら、やれやれ、という感じに肩を竦める瀧川幸仁。

アカデミアの女子専用制服を着込んで、くすくす、と笑みを浮かべている長谷部慧。

「取り敢えず、今日で春休み中の撮影は最後なんだから良いじゃん。ね？」
「チッ……わーってるよ」
最早芸能人とも大差ない彼ら。実際は約半年ほど前、地球からやって来た人間だと知る者は居ない。勿論、本人を除いてだが。
「時間は空いちゃったけど、皆集まれて良かったね」
「あぁ、まあな」
「チームＬＥＧＥＮＤｓ……“全員集合”か」
３人で笑う。温かな空気が彼らを覆った。
「これからどうするの？」
「シラネ。取り敢えず、世界の歪みの原因を探すんじゃねぇの？」
そうだな、と幸仁も同意する。
彼らも燈夜と同じく、精霊によって選ばれた人間達である。しかし未だに、その原因は分かっていない。
「けど、探すって言っても……どうやって？」
「ンな事、俺が知るわけねーだろ。テキトーに待ってりゃそっちからくんじゃね？」
「果報は寝て待て、とも言うからな」
尤も、果報では無いのだが……それは３人とも分かっているのか、それに対して何かを言う事は無かった。
沈黙が続く。
「なぁ……」

その沈黙を破ったのは、基だった。

「……なんか物足りねーんだけど」

「うん。僕もそう思ってたところ」

「……奇遇だな」

何かが、足りない。とても大事な“何か”が……。

しかし、考えても考えても思い付く事は無く、時は過ぎていった。

「あ、兄貴……！」

――暫くの後（のち）、そう言って走ってきたのは3人の男達だった。

金色の髪をした男と、赤い髪をした男。そして、鼻の辺りにガーゼを貼り付けた茶髪の男だ。

「よぉ！」

「……また、そういう奴らと一緒に居るのか？」

「別に良いだろ。人の勝手だっつの。じゃあな！」

手を上げて、基が去っていく。その姿を見届けた幸仁は、はぁ、と深い溜め息を零した。

「変わらないね……基」

「……ああ。……俺も、この後父上との会談がある。ここで失礼する」

「あ、うん。じゃあね」

頷いて、幸仁も去っていく。

「やっぱり……なんか、違う」

ぼそっと呟いた慧の声は、喧騒に掻き消されていく。

――そして、あっと言う間に一週間が経過した。

「なんつーか……運命感じるな、コレ」（後書き）

コメディ書こうとしたらシリアス書いてしまう……なんていう駄目作者。

廃棄人形というハンドルネームもあながち間違いじゃない（汗）

感想、評価等お待ちしております！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1158y/

遊戯王 LEGENDs～伝説の名の元に～

2011年11月4日15時23分発行